

会社訪問 菱神運輸 株式会社

多角化で次のステージへ 百年の歴史を未来につなぐ

地元密着の運送会社として戦後の神戸で設立された菱神運輸株式会社のルーツは、明治時代にまでさかのぼる。創業から百年以上の歴史を誇る同社は今、運送の枠を超えて成長を続けている。3代目として先頭に立つ川瀬社長に、これまでの歴史と経営理念、今後のビジョンについて語っていただいた。



川瀬 康治 社長

祖父が立ち上げ、父が守った 3代続く会社の歩み

神戸・六甲アイランドの一角に本社を構える菱神運輸株式会社。日に焼けた笑顔で迎えてくれた川瀬康治代表取締役社長は、子どもの頃からヨットに親しんできた海の男だ。1948年に法人化されてから3代目となるトップは、2007年に社長となって以来、祖父、父から受け継いだ社業を新たな視点で発展させてきた。

1909年の創業時は、三菱造船所内で石炭を配送。戦後はその範囲を神戸市一円に拡大し、広い貯炭場も持った。そこから運輸業を軌道に乗せ、1960年代には生コンクリートの輸送を開始。このタイミングで社名を「菱神運輸」とした。自動車の整備工場や海上コンテナ事業も同じ頃に始めている。

父が2代目となった後も他社から生コン製造



戦後、菱神運輸の礎を築いた初代社長の祖父



1972年ごろに乗り出した海上コンテナ事業所社屋

工場の経営を任されるなど、主軸である運輸業を成長させつつさまざまな事業を展開した。「当時は労働組合が活発な時代で、父は労働組合との関係にも苦労していたようです」と川瀬社長。転機となったのは川瀬社長が29歳で入社し、業績が落ちていた海上コンテナ事業の立て直しのために父と共に社内に委員会を立ち上げたことだ。経営側と組合側が月に一度顔を合わせ、すべての情報をオープンにして事業の未来をともに考えた。両者が納得できる形で事業の存続が決まったことで社内の雰囲気は変わり、風通しも良くなったという。以来、川瀬社長は従業員とのコミュニケーションを何よりも大切にしている。

生き残りを懸けた挑戦 M&Aで事業を多角化

父の右腕として社業に邁進するなか、川瀬



本主に並ぶ海上コンテナ用のトラック

社長が会社の将来を見据えて取り組んだのがM&Aだ。仲介会社を通じて2007年に四国の東洋物流有限会社を買収。同社の法整備や環境整備を進めて従業員と会社を守り、自社の発展にもつなげた。以来、鋼材鋼管専門輸送の真里物流株式会社、長距離輸送や生乳輸送を手掛けるSRT株式会社など、それぞれに強みを持つ運送会社をグループ化し広げてきた。

さらに2023年には保税倉庫として、まや流通センターを開設。通関業の許可も取得し、大阪のVIP株式会社との協業によって国際輸送に乗り出した。

事業の拡大とグループ会社の増加が続いたことで全体の意思統一を図ろうと、数年前にはグループのフィロソフィーを制定。「日本の物流を支え信頼される企業であり続ける」と定めたグループの理念を体現するため、すべての部署と会社に掲げている。

“量より質”の輸送で みんなが幸せな会社を

ドライバーの働き方改革につなげる2024年問題への対応では、経営方針を「量より質」に転換した。「とにかく荷主さんに話を聞いてもらおう」と社長みずから号令をかけ、値上げ交渉



社長室への通路には会社の歴史を掲示している



貯炭場のクレーンと摩耶埠頭。
祖母が描いた当時の絵を大切に飾る

を進めた。一部失った仕事もあったが、大半の取引先は理解を示し要望に応じてくれたという。長距離部門の運行回数も減らし、ドライバーがしっかり休める環境を整えた。

安全教育にも力を入れる。月に一度は本社・グループ会社すべての責任者と担当者が集まり安全委員会を開催。事故があれば原因の究明と今後への教訓を共有している。各部門でも定期的にドライバーを集めて安全会議を行い、安全を守るための環境づくりにつなげてきた。当共済とも長いお付き合いになり、「親身になって相談に乗ってくれるのがありがたい」と評価をいただいている。

今後を展望して川瀬社長は「ここで働く人みんなが幸せに生きていくことが大切。そのうえでトラック輸送については量より質を徹底してビジネスの中身を良くしていきたい。さらに国際輸送を含む総合的な物流会社として成長したい」と意気込む。祖父が立ち上げた小さな運輸会社は今や10社を数える企業体となり、新たな挑戦を続けている。



菱神運輸株式会社
(神戸市東灘区向洋町東2-1-3)